

秋のお彼岸ですね

ちつすく秋のお彼岸がやってきます。暑く寒くも彼岸までなどと言いますから、夏の猛暑が懐かしく思えるようなそんな穏やかなお彼岸を迎えられたら良いですよ。

「存知の通り、お彼岸というのは、3月の春分・9月の秋分の1年に2回あります。「春分の日」と「秋分の日」をお「中日」と言って、前後3日間の1週間がお彼岸の期間と言われています。なお、お彼岸の初日を「彼岸の入り」、最終日を「彼岸の明け」と申します。

そもそも『彼岸』というのは、読んで字の通り「向うの岸」だということです。という意味です。仏教用語で、仏様の世界。つまり浄土のことを指します。私達が今ここに居る、この世界のことを「この岸」と書いて「此岸（こがは）」と言います。その此岸に対して、亡くなった人は、此の世界を離れて、仏様の世界、魂の世界とでも申しまししょうか、彼（か）の岸と書いて「彼岸（ひがは）」です。その彼岸の世界に行くのだと言いつたに聞いています。

仏教では、亡くなった後のことだけではない、生きてる今この現世に

も、此岸と彼岸があると教えられています。つまり、苦しみや、悩みごとのある、心の迷いが多いこの世のことを此岸と呼んで、一方の彼岸というのは、苦しみや迷いから解放された、安らぎの世界、つまり悟りの世界のことを「彼岸」と教えられています。

日本のお寺では、この「お中日」に「彼岸会（ひがはえ）」という「先祖供養のための法会（ほうえ）」を執り行います。

これが実は、日本独特の行事です。仏教行事ではあるのですが、仏教の発祥の地、インドをはじめとする、他の仏教国には見られない日本特有の風習として定着しています。

ではなぜ、先祖供養のための日になったのか？については諸説ありますが、日本では昔から、農耕の1つの区切りとして祭事が行われていたのですが、そのお祭りの時期と、昼と夜の時間の長さが等しくなる「お中日」は、仏教の悟りの境地、どちらにも心が偏らない、悟りの境地とされる「中道」の思想と結びついて、現在のような日本仏教の年中行事として定着したものと考えられています。

ちよつとここで、日本に伝わるお彼岸の由来についてお話ししたいと思います。これは、あまりお聞きになったことがないお話だと思います。古い物を紐解いて判明した大変興味深い話です。

彼岸会（ひがはえ）の起源については、聖

徳太子の時代に遡（さかの）ぼるといわれておりますが、これには明確な資料がございません。平安時代初期に編纂（へんさん）された歴史書の「日本後記」には、『彼岸会』に関する初出が見られます。最初に行われた彼岸会は大和元年（AD八〇六年）に平城天皇が霊を沈めるために行ったものだとです。

日本で初めて彼岸会が行われたのは、平安時代前期、西暦八〇六年。大同元年の3月。日本後記には、次の様な文面が記録されています。「崩御した崇道天皇（すどう）の供養の為に、諸国の国分寺の僧を集め命じて、春分と秋分を中心とした前後7日間に、金剛般若波羅蜜多經（きんごうはんにゃはらみだきやう）を読ませる」と、朝廷で法要をしたことが記録され、これ以後、恒例とするように定められています。

崇道天皇というのは、第五十代の桓武天皇（かむつ）の弟、早良親王（さわら）の事です。まあ少なくとも、平安時代の初期から、彼岸の行事が行われていたと言えましょう。鎌倉時代になると、武士の間にもこの風習が広まり、江戸時代になってからは、一般民衆の間にも浸透していった、彼岸になったら墓参りをするといった風習に発展していったという風に考えられています。宮中では、宮中祭祀の1つとして、御歴代の天皇・皇后・皇親の霊を祭る儀式として、春分の日に「春季皇霊祭（しゅんきしんでんさい）」

春季神殿祭（しゅんきしんでんさい）、そして秋分の日には、秋季皇霊祭（しゅうきしんでんさい）として、秋季神殿祭（しゅうきしんでんさい）として、宮中では今現在も執り行われています。こういった歴史の中で、元々は国の祭日だったようですが、一九四八年（昭和二十三年）に春分の日・秋分の日と改称されて、国民の祝日になりました。

ちなみに春分・秋分の日を「中日」と定められたのは、一八四四年（天保十五年）江戸時代後期天保暦に改暦されてからです。それ以前は、彼岸の日取りは一定していなかったようです。「春分の日」には「自然をたたえ、生物をいつくしむ。」こと。「秋分の日」には「祖先をうやまい、なくなつた人々をしのぶ。」こと。

日本の「お彼岸」という行事は、日本独特の感性と、八百万の神々という土着の神道信仰。四季が織りなす日本の風土が作り上げた伝統行事と言えるものだと思います。季節の変わり目には、自然の恵みに感謝し、「ご先祖様に想いを馳せて供養する彼岸」という行事が、日本だけに定着したのも頷けますよね。

こうやって、日本に独自の文化が生まれた背景には、日本古来より仏教が伝来する前から日本固有の神道や祖霊信仰や自然崇拜など各地域で昔から伝わってきた歳時習俗が影響していると思っております。特に太陽ですよ。

日本という国は「日の国」ですからね。「日」というのは「太陽」です。太陽が命の元という概念から「日本」という国名になっています。私達日本人にとって命の元でもある、太陽を崇拜する行事は、彼岸という風習が広まる前から多くあります。

東から昇る太陽を「日迎え」、西に沈む太陽を「日送り」として、太陽を送りたり、太陽の動く東から南、南から西と、その太陽の道筋に沿って、手を合わせてお参りしたり、太陽を信仰する慣わしが昔からありました。太陽に祈りを捧げる。願いを込める。

つまり「日」に向かって祈願をする。「日の願」。それを「日願(ひがん)」と呼んで言い習わされてきた日本の太陽信仰の文化と、仏教の先祖を尊ぶ、命を尊ぶ。此の岸から、彼岸という「向うの岸」悟りの境地を目指す。「彼岸」の考え方が融合して、日本独自の信仰のかたちをつくり上げてきたのだろくなあとと思います。「日願」と書いて「ひがん」と読みます。やっぱり日本ってというのは、深い文化を持っているし日本人って本当に凄いなあと、感じます。

農耕民族の日本人にとって、作物を育てる太陽は、まさに絶対的な命の存在と言えるものでした。春分と秋分の日。つまり現在のお彼岸に当たる時期

は、季節の変わり目で、現代人の私達では、とても想像が出来にくい、非常に重要な節目でした。春分の頃と秋分の頃、昼と夜の長さがほぼ同じになる特別日は、冬の寒さや夏の暑さの目処がついて、農耕準備の合図です。

春には豊穰を願い、秋の収穫には、太陽に感謝し、太陽をお祀りして、また祖霊に対しても御加護を祈り感謝する儀式も行われていたようです。ある地方では、山の神様である祖先の霊を、春分以前に山から里に迎え、秋分以降に里から山へ送る儀式も行われていました。

このような太陽信仰・祖霊信仰の行事が先祖供養と結びついて、次第に仏教行事に組み込まれていったものと考えられます。

日本の土着の信仰と仏教思想から生み出された「お彼岸」という行事。こういつた日本の土着の信仰と、伝来した仏教の思想が融合して、今日私達が大切にしている「お彼岸」という行事となっていて、執り行っているという歴史が御座います。では最後に、仏教にお彼岸をどのように解釈すれば良いのか？という事についてお話しします。彼岸というのは、悟りの世界であり、仏様の世界(浄土)のことですね。そして、私達がいる欲が渦巻くこの世界を此岸(しがらみ)。つまり穢土(えご)と言われます。穢土というのは穢(けが)れのある世界ということですね。

彼岸の浄土に対して、此岸の穢土ですね。日蓮聖人が簡潔にお示しで御座います。日蓮聖人は『一生成仏抄(いっしょうじょうぶつしょう)』の中で、「浄土も穢土も実は一つなんだよ」と教えられました。

『衆生(しゅじょう)の心、汚(けが)れるれば土(ど)も汚れ、心清ければ土も清くして、浄土といひ穢土といふも土(ど)に(ふ)たつ(つ)の隔(へだ)たてなし。ただ我等が心の善悪(ぜんあく)による(よ)る見えたり。衆生(しゅじょう)といふも仏(ぶつ)といふも、また此(こ)の如(ごと)し。迷(まよ)う時は衆生(しゅじょう)と名付(なづ)け、悟(さと)る時は仏(ぶつ)と名付(なづ)けたり』と。

つまり、浄土も穢土も、幸も不幸も、悟るも迷うも、実は、自分の心次第(しんじだい)ということですね。本当の豊かさ、つまり「満ち足りている」という思いは、「いかに満足(まんじつ)感謝(かんしゃ)できる心を持っているか」にかかっています。「少欲知足(せうよくちそく)」の中に、豊かさが存在しています。足る事を知らないその心が、貧困(ひんくわん)なことなのです。不満(ふまん)を多く抱えている人の心が、飽(あ)きなき欲求(よくせう)で満た(み)されている。自分が満た(み)されない理由は、自分以外の何(なに)かにおいて、苦しみの原因(げんいん)が自分自身(おんみづかみ)にあることを知(し)ることはありません。今(いま)この瞬間(しゅんかん)に、この場所(ばしょ)が浄土(じやうど)にもなり、穢土(えご)にもなりますよ。つまり今(いま)この瞬間(しゅんかん)の場所(ばしょ)で、心の置きどころ一つで、あなたは仏様(ぶつさま)になれます。成仏(じやうぶつ)することが出来ます。そしてこの場所(ばしょ)が、仏(ぶつ)の世界(せかい)にもなり、地獄(じごく)のよう

な辛い世界にもなりますと、本当に簡潔に、ご教示(ごけうし)くださっておられます。間(ま)もなく迎(むか)える秋(あき)の彼岸(ひんがし)には、浄土(じやうど)の心(こころ)になって、真心(まごころ)からご先祖(ごせんぞ)様(さま)への報恩(ほうおん)感謝(かんしゃ)を手(て)向(む)けて頂(たま)ければ幸いです。

合掌 副住職 谷川寛敬



Youtube みてね！

